

■間重富 商人にして天文学者。麻田剛立門下のトップながら、寛政の改暦はじめ、天文方・学者の縁の下で力持ちに徹した。

はざましげとみ
・ ・ ・ ・ ・ 1756＝ 大坂長堀富田屋町の北詰で、質屋を営む羽間屋6代目重光の第六男に生まれる。幼名孫六郎。藤原秀郷を祖とし、蒲生氏の子孫で、領地迫(はさま)村にちなんで羽間を名乗った武士の末裔が、寛永の始めに、製油業を始めて、町人になり、発展して、2代目には質屋を始めている。

大岡忠光没・1760＝ 4歳：
蔵が11もあって{十一屋(といちや)}と呼ばれた裕福な家に育つ。

蘭銭初輸入・1765＝ 9歳：

明和事件・ ・ 1767＝11歳：渾天図を子細に観察、数日後には渾天儀を造ったという伝説があるくらい、
久留米藩工事1768＝12歳：この年、頼春水の師でもある漢学者平賀晋民が京都に移住して開いた塾で、

御蔭参流行・1771＝15歳：父が死去。兄たちが夭逝していたため、家業を継ぐことになり、通称は十一屋五郎兵衛(7代目)。
田沼意次老中1772＝16歳：

解体新書・ ・ 1774＝18歳：この頃には、和算にもめり込んで、

・ ・ ・ ・ ・ 1781＝25歳：この頃、姓の羽間を間に変えている。
天明大飢饉始1782＝26歳：母も死去。習い始めた時から、病気がちだった平賀晋民を、京都の門人らが引き留めてきたのを振り切って、大坂に迎えて庇護。この間、とくに、正確なカレンダーを創ることを志すようになり、

蘭学階梯・ ・ 1783＝27歳：この頃から、天文暦学にも詳しい和算家坂正水に就いて学ぶ。
田沼意知刺殺1784＝28歳：隣家の火事が延焼し、蔵は一つを残して全て焼け落ちてしまうが、落胆するどころか、天の戒めと返って祝したという。のちには、蔵が15に増え、“十五楼主人”とも号する。質屋を営むかたわら、自宅に観測用の高台を設け、天体の観測に励んだ。また、観測の精度を高めるため、自ら考案した様々な観測機器を職人に作らせ、天球儀、渾天儀(竹製)、渾天儀(黄銅製)、反射式望遠鏡各1台が現存する。

田沼意次失脚1786＝30歳：子の重新(しげよし)が誕生。ほかの男子2人は夭逝。
寛政改革始・ 1787＝31歳：*天学塾{先事館}の麻田剛立に入門。同時に入門した大坂御定番同心の高橋至時とは盟友になる。この前後、和算の師坂正水も入門したらしい。

・ ・ ・ ・ ・ 1788＝32歳：老中松平定信が学問振興のため、柴野栗山とともに、平賀晋民を招聘、固辞するも3年のみということで応じると、自ら先に江戸に行って、師の世話をする。それと合わせてか、蘭方医小石元俊と共同で、市井の傘職人だった橋本宗吉を後援し、江戸へ遊学させている。

初の横綱・ ・ 1789＝33歳：この年の日食が、現存する最古の観測記録。“異学の禁”の関係か、晋民は大坂に戻る。橋本宗吉も、抜群の才能を見せて、わずか1年で大坂に戻り、のち、関西蘭学の祖と呼ばれるようになるなど、大坂町人社会の中に蘭学、科学が広がるのにも貢献。

ラクスン来日・ 1792＝36歳：前年、畢生の書「春秋稽古」81巻を書き終えた平賀晋民が死去。大坂に遊学にきた佐藤一斎の面倒を見る。
松平定信引退1793＝37歳：

西洋天文学を用いての改暦を目指す幕府から指名されるも自らは断った麻田剛立の推薦で、
写楽・ ・ ・ 1795＝39歳：*高橋至時とともに、幕府から江戸に招かれ寛政の改暦事業に参加。武士であった高橋至時が天文方になり、自らも正式にその御用を命じられ、至時に入門してきた伊能忠敏に、京都出張の多い至時に代わっての指導も行う。同行してきた坂正水は、江戸下りは無理だったのか、まもなく死去。観測機器により正確な天体の運行を観測するとともに、麻田剛立の理論、人脈を利用して入手した貴重書「曆象考成 後編」を参考に、
昌平黉始・ ・ 1797＝41歳：「歴法新書」を編纂。これを元に、日本初の西洋天文学を適用した「寛政暦」が完成し、
古事記伝・ ・ 1798＝42歳：*施行された。この功績により、幕府の天文方と同格の待遇を受け、苗字を名乗ることを許され、学者・間重富になる。御用を終えて大阪に戻り、以降、子の重新に天文教育しながら、北堀江・富田屋橋に英国製の観測機器を備え、入門してきた讃岐の舵職人の子久米栄左衛門らと、天体観測や陸地測量を続ける。

蝦夷地直轄始1799＝43歳：師麻田剛立が死去。
伊能測量始・ 1800＝44歳：伊能忠敏が測量を開始。考案してきた観測機器が、日本地図の作成に大いなる助けになった。
宣長没・ ・ ・ 1801＝45歳：円に関する原理の考察した数学の論文「算法弧矢索隠」を書き、
一九膝栗毛始1802＝46歳：至時の指示で、経度の測定のため、子の重新を伴って、長崎に出張、オランダ商館を訪ね、初めて、シルケルという測量器具を見、のちに、馬場佐十郎から、その用途を聞いている。「山陽道実測図」を監修。

バゾフ来航・ 1804＝48歳：フランスの天文学者ランデの蘭書の解説で無理をした高橋至時が急逝、その長男景保が天文方を継ぐも若かったため、その後見人のような立場として、再び出府を命じられる。

青洲麻酔手術1805＝49歳：垂揺球義の原理と惑星運航原理との考察「垂球精義」、この間、漂流した船頭津太夫のロシア見聞を、大槻玄沢が「環海異聞」としてまとめるのを、地図の面からサポート。景保、景佑の進路が確定し、

フェート号事件 1808＝52歳：日時計に関する小論「易法考」、天地二球用法評説「星学諸表」。馬場佐十郎も着任して、世界地図制作作業が順調に進むようになったことから、

浮世風呂・ ・ 1809＝53歳：景保は、試作として「日本边界略図」「新撰総界全図」を、亜欧堂田善による、日本初の銅版で刊行。*麻田剛立門下の足立信頭を推挙して、大坂に帰り、
・ ・ ・ ・ ・ 1810＝54歳：高橋景保の「新訂万国全図」が完成し、礼状が届く。景保のためにと、中国の度量衡を、現物調査して明らかにすべく、病勝ちな身体をおして、各地の寺社等を訪問するなどするうち、

伊能測量終・ 1816＝60歳：伊能忠敏が日本国中の測量を終えた年、没した。
子の重新は数学が得意で、器械にも強く、天文方の御用測量を務め、その子も後を継ぐが、孫の代に維新となり、御用停止になった。